論文

狐仙信仰と邪症治療

── 湖北省丹江口市山村社会の事例を中心に ──

程　　亮

CHENG Liang

非文字資料研究センター　2015 年度奨励研究採択者
広東外語外貿大学専任講師
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程

【要旨】 狐仙〈Huxian〉信仰は中国北方地域において極めて普遍的な民間信仰の一つである。中国人にとって、狐は古代から身近な動物であった。狐が霊力を持つ生き物と信じられ、やがては狐信仰、狐神信仰、狐仙信仰という伝承となって定着していくのである。現代中国の東北地方や華北地方などの農村部では、今でも狐仙祭祀の事例が報告されている。

筆者は 2014 年から 2016 年まで、これまで狐仙信仰調査の空白地帯である華中地方に入り、湖北省西北部の山村部において狐仙信仰の現地調査を行った。調査地では、狐仙が家に祀られる理由に邪症〈Xiezheng〉治療と富の増加があげられるが、「病気が治った」という理由で狐仙を祀り始める事例が多い。それは、現地では狐仙の憑依、祟りが邪症の原因と見なされているためである。村人たちは「病気」を「実病〈Shibing〉」と「邪症」に分けて対応する。邪症の原因に、鬼、祖先、神の祟りなどがあるが、狐仙の憑依、祟りがほとんどである。本発表では、湖北省西北部の山村部における邪症治療の実態を報告し、それと狐仙信仰の関係性を明らかにした。

当地における邪症の治療者として、馬子〈Mazi〉、法官〈Faguan〉、端公〈Duangong〉、陰陽仙〈Yinyangxian〉などの民間巫医がある。彼らは邪症の原因を狐仙などの超自然的存在と説明し、邪症の治療を行い、狐仙信仰の伝播者として存在する。

邪症の病者に女性が圧倒的に多い。村社会の女性たちは婚姻、生育、家庭安全などの面で男性より精神的ストレスを受けているため、時には元気も気力も弱くなり、時には熱が出て頭痛し、時には意識障害になる。彼女たちは上述した症状を邪症と認識し、巫医に治療を求める。邪症が治った際、病者は狐仙の信者となり、その信仰の伝播者として存在する。

狐仙信仰は邪症の説明体系として巫医たちによって維持され運用されていると考えられる。また、邪症治療という実践を通じて治療者・巫医と病者・村人の双方によって伝承されている。

Huxian Belief and Xiezheng Treatment

── Focusing on the case of mountain village society in Danjiangkou, Hubei, China ──

Abstract：*Huxian*（fox sage）belief is one the most common folk belief systems in northern China. For Chinese people, the fox has from ancient times been a close being. The fox is believed to be an animal that possesses spiritual power and in time the tradition passed down as “fox belief”, “fox god belief” and “fox sage belief” began to take hold. Even today, cases of fox worship are reported in the rural villages of Northeast and Northern Regions of China.

From 2014-2016, I have researched the central Chinese region, which until now has not been investigated, investigating the fox belief in the mountain villages of the northwest part of Hubei

Province. In this area, *xiezheng* (evil spirit illness) treatment and increased fortune have both been given as reasons for worshiping the fox in homes but "my illness was cured" was the more commonly offered reason for beginning to worship the fox. This is because possession by or a curse from a fox is believed to be a cause of the evil spirit illness. The villagers categorize illnesses as either *shibing* (real illness) or evil spirit illness. Here I report the actual situation of evil spirit illness treatment in the northwest of Hubei Province and make clear its relationship with the fox sage belief.

The people who treat evil spirit illnesses in this area are folk shaman doctors, knowns by a number of names such as, *Mazi*, *Faguan*, *Duangong* and *Yinyangxian*. They explain the source of these evil spirit illnesses as coming from supernatural beings such as the fox sage and in conducting their treatment act as promulgators of fox sage belief.

Females far more commonly suffer from evil spirit illnesses. In village society, issues of marriage, childbirth and rearing and looking after the safety of the family mean they receive far more mental stress than men and at times lose their strength energy to the point where they get fevers and/or headaches or even lose consciousness. They consider the above symptoms to be from an evil spirit illness and look to a shaman doctor for treatment. When the evil spirit illness is healed, they become believers in fox sage belief and spread the word of its power.

Fox sage belief can be considered to be perpetuated by the shaman doctors who use it as an explanation system of evil spirit illnesses. Also it is passed down between both those who in actuality provide treatment for evil spirit illnesses, the shaman doctors, and the patients, the villagers, in a mutual belief system.

はじめに

狐仙〈フーシェン〉[(1)]信仰は、中国北方地域において極めて普遍的な民間信仰の一つである。中国人にとって、狐は古代から身近な動物であった。狐が霊力を持つ生き物と信じられ、やがては狐信仰、狐神信仰、狐仙信仰[(2)]という伝承となって定着していくのである。現代中国の東北地方や華北地方などの農村部では、今でも狐仙祭祀の事例が報告されている[(3)]。

筆者は 2014 年から 2016 年まで、これまで狐仙信仰調査の空白地帯である華中地方に入り、湖北省西北部の山村部において狐仙信仰の現地調査を行った。まず、現地の村で口頭伝承されている狐精故事[(4)]を採集、類型化し、その特徴をまとめた[(5)]。また、狐仙祭祀の実態を記録し、東北地方と華北地方の事例を比較しながら、その特徴を明らかにした。湖北省西北部における狐仙信仰は、華北地方の漢民族が明朝の初期に西南移住の際に伝播、定着の過程で、漢水領域と武当山の周辺で地方の伝統的な民間信仰と出会い、次第に変容した可能性が高いと考えられる[(6)]。

調査地では狐仙が家に祀られる理由に、邪症〈シェージャン〉治療と富の増加があげられるが、「病気が治った」という理由で狐仙を祀り始める事例が多い。それは、狐仙の憑依、祟りが邪症の原因と見なされているためである。村人たちは「病気」を「実病〈シービン〉」と「邪症」に分けて対応する。邪症の原因に、鬼〈グウィ：幽霊〉、祖先、神の祟りなどがあるが、ほとんど狐仙の憑依・祟りである。本稿では、湖北省西北部の山村部における邪症治療の実態を報告し、それと狐仙信仰の関係性を明らかにしたい。

Ⅰ　調査地の概要

湖北省西北部の農村社会では、民間の巫医[7]は狐仙を利用し退散させることによって病気の治療を行っている。

筆者は2015年3月15日～20日、8月10日～17日、9月3日～11日、2016年3月17日～24日、4月26日～5月1日、8月10日～30日の6回に分けて湖北省丹江口市L村、S村、H堡、W村における巫医の病気治療について実地調査を行った。L村、S村、H堡とW村は漢水の南、武当山の北麓の奥深い峰々に隣接している四つの山村である（図1）。L村は戸数約400戸、人口約1500人、S村[8]は戸数約350戸、人口約1400人、W村は戸数約200戸、人口約800人という、いずれも中、大規模の村落である。村人たちは谷間、沢、山腹、窪地の間など十数か所に分散して居住している。主な生業は農業で、主要な作物に稲、麦、トウモロコシ、ミカンなどがある。1990年代から、沿海地域の江蘇省、広東省への出稼ぎ労働者が多くなり、2000年代には出稼ぎ収入が家庭の主な収入源となっている。厳しい自然環境の下で経済の基盤が弱く、中でも丹江口市は開発が最も遅れた地域でもある。近年、武当山の観光開発に伴い、外省へ出稼ぎに行った村の若者は故郷に帰り、観光業に従事する者が増えている。

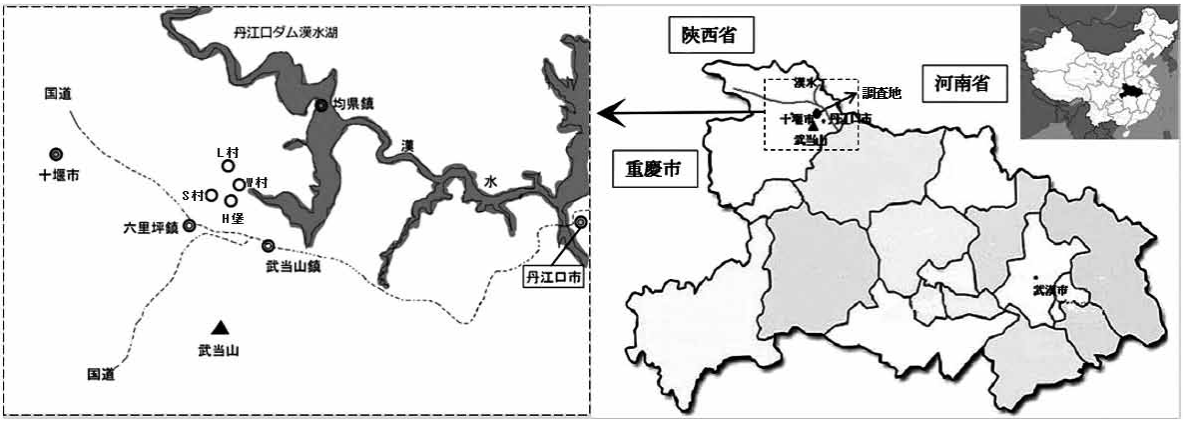

図1　調査地の位置と周辺図（筆者作成）

新中国成立の前、ここには非常に厳格な風俗規律があり、民間信仰が盛んであった。L村、S村、W村で、個人あるいは村全体の名義で、泰山廟、土地廟、火神廟、牛王廟、馬王廟、大仙廟〈ダーシェンミオ：狐仙を祀る祠〉など数多くの廟が建てられた。それらの廟には神様が祀られており、村人たちは頻繁に参拝に訪れた。ここは中国道教の聖地――武当山に隣接しているため、各村では武当山参拝の小グループが組織され、小グループからまた一つの大グループが組織される。グループ責任者はそれぞれ「小会頭」、「大会頭」と呼ばれる。村人全員が順番に武当山に参拝するよう取り決め、年に一度は、全員で参拝を行う。しかし文化大革命の時、村に祀られた神様は「封建迷信」と見なされ、廟はほとんど政府側に破壊され、村人の祭祀・参拝も厳しく禁じられた。1980年代以降、村では個人の名義で大仙廟や土地廟のような小廟・小祠を建て直したが、数は昔ほど多くなかったという[9]。

狐仙は村に祀られていた神々の中の一つである。当地では、狐とイタチは霊力を持つものと思わ

れ、長年の修行をすれば、仙になるといわれている。村人は仙になった狐を「大仙〈ダーシェン〉」、イタチを「西仙〈シーシェン〉」と呼んでいる。大仙や西仙に不敬な行為を行えば特異な病気にかかり、病院に行っても治らず、当地の巫医に頼まなければならないという。このような病気は邪症〈シェージャン〉と呼ばれる。

Ⅱ　湖北省西北部の邪症治療の事例

ここでは、筆者が調査を行った湖北省西北部の山村社会における「邪症治療」の事例を紹介したい。これらの事例は、筆者が丹江口市Ｌ鎮において、四つの山村に在住している村人に対して公式もしくは非公式の聞き取り調査で得られた情報のうち、比較的まとまっているデータ 12 事例について、話者からの言葉をそのまま記述したものである。

【事例①】 2015 年 3 月、Ｗ村、Ｆ氏、1952 年生まれ

文化大革命の後、母親は突然特異な病気にかかった。体がだるくなり、頭痛が止まらなかった。多くの医者に診てもらったが、治らなかった。ある法官〈ファーグウァン〉[(10)]に診てもらったら、大仙が祟ったというので、屋内の暗い所で大仙を祀るようにといわれた（写真 1）。木牌を作って大仙を祀る（写真 2、3）と、やがて母親の病気がよくなった。その後、無病息災のために家にずっと祀っている。

写真１　狐仙を祀る場所

写真２　狐仙の木牌

写真３　狐仙を祀る様子

写真 1～3（2015 年 3 月筆者撮影）

事例①では、Ｆ氏の母親は法官に邪症の治療をしてもらった。法官の説では、邪症の原因は狐仙（大仙）の祟りだという。母親の邪症が治ったことがきっかけで、Ｆ氏一家は狐仙を信じるようになり、それ以来家に祀るようになった。狐仙を祀る御利益は、母親の「無病」からＦ氏一家の「無病息災」へと変わっていったようである。

【事例②】 2015 年 3 月、Ｗ村、Ｌ氏、1948 年生まれ

文化大革命の前、兄嫁が邪症にかかり、治らなかったので、隣のＦ村に住んでいる法官に診てもらった。法官は大仙の祟りだといい、軸子〈ジョウズ：掛け軸〉に「供養大仙」と書いた。

兄嫁はその軸子を自宅の２階に祀っていた。その後、病気がよくなったという。

事例②は事例①とほぼ同じであるが、狐仙を祀る際に使うものは、木牌ではなく「供奉大仙」という軸子であった。

【事例③】 2015 年 8 月、S 村、C 氏（女）、1946 年生まれ

西仙は仙になったイタチで、よく村人の庭に入り、鶏を襲って食う。母親は小さいイタチをとったことがある。その後、熱が出て、頭痛が続いた。村の陰陽仙〈インヤンシェン〉[11]に診てもらったら、西仙が祟ったのだという。母親が仕方なく西仙を祀った。以降、イタチをとらないようになり、木牌を作って西仙を祀るようになった。

事例③は西仙の祟りが邪症の原因と見なされる珍しい一例である。調査地では、西仙は修行を積み重ねたイタチのことで、卵の殻で物を運ぶことができるといわれている。狐仙は「邪症」と関わっているが、西仙については富を運ぶ神様としてよく知られている。

【事例④】 2015 年 9 月、S 村、Z 氏、1941 年生まれ

1960 年代、妻は変な病気にかかり、毎日虚ろで、寝てばかりだった。病院へ行って診断を受けたが、治らなかった。隣の村の馬子〈マーズ〉[12]に診てもらったら、大仙の祟りだと分かった。その後、秘かに家に大仙を祀った。妻の病気も治った。

しかし、2015 年に新居に引っ越したばかりの時、妻は再び体がだるくなり、大仙の祟りだと思い、何日間も連続して大仙を祀った（写真 4）。

事例④では、Z 家の神台には狐仙と西仙が祀られている。狐仙は邪症の全癒を願う際、また西仙は発財〈ファーツァイ：金持ちになる〉を願う際に祀るという。1960 年代から 2015 年まで、Z 氏の妻が何回か邪症にかかったが、狐仙を祀れば治るので、ずっと狐仙を祀っているのである。

写真 4　狐仙と西仙を祀る Z 家の神台

写真 5　黄連の木の下にある大仙廟

写真 4〜5 （2015 年 9 月筆者撮影）

【事例⑤】 2015年9月、H堡、H氏、1946年生まれ

1950年代に、兄嫁が変な病気にかかり、ぼうっとしていて元気がなかった。病院に行って医者に診てもらったが、治らなかった。H村の袁端公〈デンゴン[13]〉を家に呼んで診てもらった。袁端公は兄嫁が大仙に憑かれたのだと教えた。夜、袁端公は兄嫁に竹ざるを被せ、灯をともしてみると、狐が現れたといって、狐を追い払った。兄嫁は狂ったように走り、黄連の木をぐるぐる回っていた。やがて彼女は落ち着き、寝てしまった。袁端公は兄の家の前と後ろに一皿の米をまいた。また、家の後ろにある黄連の木に大仙が棲んでいるので、大仙を祀るようにと兄に言った。兄は袁端公の言ったとおりにして、黄連の木の下に小さい廟を建てた。それは大仙廟だった。1週間後に、兄嫁はだんだんよくなってきた。兄は礼金を袁端公に渡し、毎年大仙廟で香を上げ、黄紙を焼やして大仙を祀るようになった。以降、家族に正気でなくなった人や奇妙な病気にかかった人がいれば、大仙を拝み、大仙廟で祀るのだった。文化大革命の時、大仙を祀ることは迷信とされ、大仙廟は政府側の人間に壊された。その後、私も奇妙な病気にかかったので、こっそりと大仙廟を建て直した（写真5）。病気平癒の願い事がなくても、家では春節などの祝日に大仙廟で祀っていたが、兄が何年か前に亡くなってから、祀らなくなった。

調査地では、狐仙は屋内に祀られることがほとんどであるが、事例⑤のように屋外の「大仙廟」に祀られるのはわずか1例である。屋内祭祀が屋外祭祀より圧倒的に多いのは、大仙廟が昔から政府側に「淫祠」と見なされているため、村人たちが他の人に知られないように屋内で秘かに狐仙を祀るためだと考えられる。狐仙信仰は秘匿性が高く、個人で利用する傾向にあることが分かる。

【事例⑥】 2015年9月、S村、W氏、1947年生まれ

H堡[14]H氏の家の後ろにある黄連の木に棲む狐仙の霊験を信じ、「願掛け」を行っている。木の下に大仙廟が建てられ、H堡の近くに変な病気にかかった村人がいれば、大仙廟で香を上げて黄紙を焼やして拝んだら、すぐ治るという。

1950、60年代に、大仙廟で大仙を祀る人が特に多かった。H堡の人だけでなく、隣村からお参りする人もいた。その後、参拝者が絶えなかった。今でも祀る人がいるようだ。大仙廟は高さ80センチの小さい廟で、上に香炉があり、下に黄紙を焼やすところがある。

事例⑥の「大仙廟」は事例⑤のと同じものである。H氏の兄が建てた狐仙廟は元々H氏の兄嫁の邪症平癒を祈願して狐仙を祀る所だったが、やがてH氏一家がそこで祀るようになった。狐仙の霊験が村中、隣村に広まるにつれ、祀る人は更に多くなった。

【事例⑦】 2015年8月、L村、S氏、1936年生まれ

妻（Y氏）が1980年代に突然に狂ってしまった。毎日、魂が抜けてしまったように独り言をぶつぶつ言うばかりで、「大仙に憑かれた。大仙から不思議な力をもらった」と言い続けた。その後、大仙を堂屋〈タンウー：メインルーム〉の神台に祀るようになり、大仙を「徐仙」といった（写真6）。ちょうどその時、隣の村におかしい病気にかかった20才未満の女の子がおり、霊

力を得た妻が診て、治った結果、その霊験談がだんだん六里坪鎮や丹江口市に広まっていったようだった。

1990年代に邪症治療の依頼がとても多かった。妻を尋ねて邪症を治してほしいという人が毎日1人ぐらいいるという。2000年以降もその人数は減ることなく、広東省や上海市のような遠い所から来た人もいる。妻の治療を受けて治った病人が多かったので、評判がよくなり、尋ねる人が更に多くなった。私も妻の治療に助力するようになった。治った病人は願ほどきをするために、ドラと爆竹を鳴らしながら、村の外から村に入り、家の堂屋に入る。堂屋に紅布〈ホンブ[15]〉、錦旗〈ジンチイ[16]〉を上げ、礼金を妻に渡す。錦旗には、神々の名前が書かれており、「徐仙」と呼ばれる狐仙が最上位の天井近くに掲げられている（写真7）。礼金は多い時には何千元、少ない時でも何十元あった。妻は邪症の治療でお金をたくさん儲け、息子もそのお金で2000年前後に鎮でマンションを買った。

治療する際、妻は堂屋の神台に置いた灯をともし、香を上げ大仙を拝み、祈禱をした。祈禱が30分ぐらい続いたが、祈禱の内容は聞き取れなかった。やがて、「大仙が来た」といって、体の震えが止まらなくなった。その後、震えはだんだん大きくなり、突然に椅子から躍り上がって四角い机に座り、「武当山から来た徐大仙だ」と唱えながら名乗った。それから病人に病状を聞き、「大仙に不敬なことをしたので、憑かれたのだ」と言った。その後、机から降り、ひざまずいて堂屋を出て、外の十字路にひざまずいたまま、泣きながら何か呪文のような詞を唱えて黄紙を燃やした。黄紙を焼やし尽くしてから、ひざまずいたまま、後ろ歩きで堂屋に戻った。儀礼が終わってから、病人に大仙を祀るようにと言いつづけた。病人は当日の夕食後に、妻の言ったとおりに部屋を出て、妻がひざまずいた時に向いた方向を向いて大仙を拝み、黄紙を1キロぐらい焼やした。三晩連続して大仙を祀ったのだった。その後、病気が不思議にだんだんよくなってきたという。

写真6　狐仙を祀る堂屋の神台

写真7　狐仙の名が書いてある錦旗

写真6〜7（2015年9月筆者撮影）

事例⑦と⑧は、巫医の治療を受けるのではなく、夢の託宣で自ら治った例である。事例⑦に馬子Y氏の成巫過程が見られる。Y氏は当初、自らが邪症にかかり、苦しんでいたが、やがて夢の託宣で成巫して邪症の治療を行うようになった。彼女は自分が邪症になった原因は狐仙の憑依だと説明し、狐仙を「守護神」として祀ることによって、その霊力を利用し邪症の治療を行っていた[17]。その

後、彼女の説明を聞いて治療を受けた病人も深く信じるようになり、狐仙を祀るようになった。このように、狐仙信仰はＹ氏によって邪症治療の説明に活用されていると考えられる。換言すれば、狐仙信仰は巫医による邪症治療の説明体系であることが分かる。

Ｙ氏は邪症治療を行う際、いつもトランス状態に陥っている。このトランス状態はシャーマニズムの典型的な要素であると思われる。したがって、馬子は中国北方のシャーマンから由来する可能性が高いと推測できる。

【事例⑧】 2016 年 3 月、W 村、G 氏、1942 年生まれ

子供の時、重い病気にかかり、狂ってしまった。とても疲れるので、ご飯を食べる気力もなく、食事は１日１回という状態であった。高い神櫃〈シェングイ：神様を祭る高い机〉にもすぐ跳ね上がる。周りの人に精神病だといわれた。隣村の李法官は邪症治療の評判がとてもよかったが、既に亡くなったので、彼の息子に邪症を診てもらった。すると、大仙に憑かれたと言われ、払ってもらったが、治らなかった。翌日の夜、李法官が夢に現れ、病気の治し方を教えてくれた。李法官に法官廟を建てるようにと言われたので、家の横に小さい法官廟を建てた（写真 8）。その後、病気がだんだんよくなり、自分も邪症の治療を行うようになった。1980 年代には、頻繁に隣村に行って邪症を治した。治った病人はお礼として錦旗を法官廟に上げ、礼金を私に渡す。李法官に邪症の治療法を教えてもらい、生活が維持できたので、いつも彼の霊威に感謝して祀る（写真 9）。

写真 8　法官廟

写真 9　李法官の霊威に感謝する

写真 8～9（2016 年 3 月筆者撮影）

事例⑧は事例⑦とほぼ同じで、夢の託宣で邪症の治療法を習得した例である。しかし、G 氏は狐仙の霊力でなく、李法官の霊威を利用した。彼の治療法はトランス状態を伴う口寄せのシャーマニズム的な儀礼ではなく、令牌〈リンパイ〉[18]と法水〈ファースイ〉[19]を使って狐仙や鬼を追い払う民間道教的な儀礼である。

【事例⑨】 2016 年 4 月、W 家、Z 氏（女）、1960 年生まれ

大仙に付きまとわれるとひどい病気になる。父方に劉老二という親戚がいる。1970 年代、劉の兄は徴兵に応じ、体格検査を受けて合格した。軍隊の人が村に迎えに来て、私たちがドラを鳴

らして彼の兄を見送った。その後、村の人たちと一緒に昼ご飯を食べてから、劉は自分の部屋に入って昼寝をした。午後3時になって劉を起こそうとし、何度もノックしたが、返事がなかった。ドアを開けてみたら、劉がベッドから落ちて地面に寝ていた。彼は目覚めたら、泣きながら親から離れたくないと言った。狂ったのだと親戚が心配していた。すると、彼は家前の石磙〈シーグン[20]〉を1人で回した。石磙はとても重くて普段は2、3人でも回せないのに、なぜ彼が簡単に回せるのだと皆が不思議に思った。その後、隣のF村から法官を呼んできて、診てもらった。法官は彼が大仙に付きまとわれたと言った。煉瓦を七つ取り、赤くなるまで焼いて、煉瓦の上を渡るようにと彼に命じた。彼は法官の言うとおりに煉瓦に踏んで渡ったが、足に何もやけどがなかった。法官は仕方なく「この大仙は腕前が自分よりすごいので、払えない」と彼の親戚に言った。その後、毎日何をする気もなく、寝転んでぼうっとしていた。ずっと独身だった。今どこに行ったか分からないが、大仙に憑かれて仙になったかもしれない。

事例⑨は治療失敗の例であった。面白いことに、邪症の治療が失敗しても、狐仙の憑依が邪症の原因であるという災因論は依然として村人たちに信じられている。

【事例⑩】 2016年4月、S村、W氏、1953年生まれ

妻は2012年に大仙に憑かれたことがある。意識がはっきりしなくなり、笑ったり泣いたりする。病院に行って診てもらったが、治らなかった。河南省許昌県から来たL氏という遊医〈ユーイ：遊行する民間巫医〉に診てもらい、大仙に憑かれたと教えてもらった。L氏の言ったとおりに、宴席を設けて、大仙に奉納する野菜料理を4品作った。L氏は線香を9本上げ、黄紙を3梱[21]燃やし、体が震え始めた。「大仙が来た」と言いながら、足で地面に十字を引き、呪文を唱え、妻の周りを1周回り、大仙を送った。その後、妻の病気が治った。そこで、家族は大仙のことを信じるようになった。

L氏は子供の時、邪症になったことがあるが、母親に治してもらった。母親は巫医で、亡くなる前に、河南省の家に狐仙を祀っていた。彼は母親の影響で邪症治療の技術を学んだと言った。大人になってから、山東省や湖北省に出稼ぎに行ったが、邪症の治療は兼業として行っているという。

事例⑩の遊医L氏は事例⑦のY氏と同じように、トランス状態が伴い、超自然的存在と思考の伝達ができている。調査地の周辺では、L村のY氏による邪症治療は評判がよかったが、2011年にY氏が亡くなってから、邪症の治療は一時中断したようだ。S村W氏のように、邪症治療のニーズがある場合、遠い所へ行って巫医を尋ねるか外の遊医を呼ぶしかない。

【事例⑪】 2016年3月、W村、L氏、1948年生まれ

私は陰陽学〈インヤンシェー：風水〉が分かるので、時々風水の鑑定や邪症の治療などの依頼が来る。1990年代に、隣村の張家の娘がおかしい病気にかかった。鎮の病院の医者に診てもらったが、治らなかった。張家の人はこれが邪症だと思い、法官に来てもらった。すると、娘が大

仙に憑かれたのだと分かった。法官に払ってもらったが、やはり治らなかった。張家の父親が仕方なく私に電話をかけ、娘の邪症治療を頼んだ。行ってみたら、娘がベッドの上でピョンピョン跳ねたりしていて、周りに多くの人が集まり賑わっていた。張家の母親や叔母たちがベッドの側に立ち、大声で泣いていた。部屋に入った途端に、娘は急に静かになり、病気も治った。周りの人が口々に、不思議だと言った。娘に事情を聞いたら、何も覚えていなかったようだ。狐仙が自分の煞気〈サーチー：恐ろしい気〉を恐れるかもしれない。山には精怪〈ジングァイ：妖怪〉が多く、時々村に入っては、暴れて人に憑くが、精怪は煞気の高い人を恐れるといわれる。元気な人や男性には、高い煞気を持つ人が多いが、女性は少ない。人間に憑くモノに狐仙が一番多い。また、鬼、家親〈ジャーチン：祖先〉、山混子〈サンフンズ：山の化け物〉もある。時には、廟の神様も憑くのだ。廟の神様というのは、祖師爺〈ゾーシーイェ：武当山の真武大帝[22]〉、泰山娘娘、牛王爺、馬王爺のことだ。

事例⑪では、狐仙、鬼、祖先、神などの超自然的存在の祟り・憑依が邪症の原因として詳しく紹介されている。話者のＬ氏は農民で、副業として邪症治療を行っている。彼は子供の時、塾で四書五経を勉強したことがあり、読み書きもできる。青年時には、鎮の陰陽先生から陰陽、八卦、風水などの知識を習った。その後、人民公社の生産大隊に入り、働きながら会計の勉強を続けてきた。彼はいわゆる在村知識人のような存在で、冠婚葬祭や風水や邪症の問題が発生した場合、いつも村人たちの相談相手になる。

【事例⑫】 2016 年 8 月、L 村、ZX 氏、1950 年生まれ

小学校に 2 年ぐらい通っていた。家はとても貧乏なので、仕方なく学校をやめた。その後、ずっと農業に従事している。1982 年から今まで邪症の治療を行うようになった。邪症の治療はどこかで習ったわけではなく、ある日、夢を見て神様に教えてもらった。神様は観音老母〈グァンインラオムー：観音様〉、斉天大聖〈チイテンダイシァン：孫悟空様〉、雷公爺〈ライゴンイェー：雷神様〉、龍王爺〈ロンワンイェー：龍神様〉と太上老君〈タイシャンラウジュン[23]〉の五つである。邪症を引き起こすモノに大仙、西仙、陰人〈インレン：亡くなった人の霊〉などがある。1980 年代以前は、大仙が一番多かったが、今はあまりない。1980 年代以降、狐がいなくなったので、大仙の憑依も少なくなってきたからだ。大仙に付きまとわれると、元気がなくなり、食欲もなくなる。時間が経つと、死ぬ人もいる。大仙に憑かれたら、観音、雷神などの神様を呼んできて、大仙を鎮める。大仙はまともな神ではないので、観音などの神様に支配されるのだ。

1980 年代から今まで千人以上の邪症病者を診てきた。1980 年代に、邪症の治療を求める人が多かったが、今は少なくなっている。お昼に農業をやっているが、夜に邪症の治療を行うことが多い。治療の際、出符〈チューフー：神符を書き上げて焼やす〉という儀式を行い、邪症を引き起こすモノを読み取る。最初の 3 年間は少しもお金をもらわなかったが、その後 20、30 元ぐらい礼金としてもらっている。貧乏な病者にはお金をもらわない。隣村の病者はいつも私のところに来る。病者は女性と若者が多いが、年寄りが少ない。

事例⑫の邪症治療者は巫医ではなく、普通の農民である。彼はとても貧乏だったので、農業をしながら、兼業で邪症治療を行っている。彼の話では、邪症治療の収入は農業の収入より多いという。また、事例⑪と同様に、大仙が邪症の原因に言及されているが、1980 年代から産業や生活基盤の開発に伴って狐がいなくなり、邪症の原因としての大仙も消えてきている。この事例では「出符」という儀式が紹介されているが、元々法官が邪悪なモノを払う際に行う儀式だった。2010 年代以降、この地方では法官がほぼ消えてしまった。ZX 氏は神託で習ったと言っているが、法官の儀式をまねた可能性が高いと思われる。

Ⅲ　邪症の原因と類型

上述した邪症治療の事例を「場所」、「時期」、「病者」、「症状」、「原因」、「治療者」、「治療方法」、「治療結果（病症・病者）」という項目で整理し、類別表（表 1）にした。尚、事例は上述した順で作成した。

表 1　湖北省西北部の農村社会における邪症治療の類別表

事例	場所	時期	病者	症状	原因	治療者	治療方法	結果（病症）	結果（病者）
①	W村	文革の後	母親	だるい、頭痛	大仙の祟り	法官	不明	治った	大仙を祀る
②	W村	文革の前	兄嫁	不明	大仙の祟り	法官	軸子奉納	治った	大仙を祀る
③	S村	不明	母親	熱、頭痛	西仙の祟り	陰陽仙	不明	治った	西仙を祀る
④	S村	1960 年代	妻	ぼうっとする、寝たきり	大仙の祟り	馬子	不明	治った	大仙を祀る
⑤	H堡	1950 年代	兄嫁	元気がない	大仙の憑依	端公	狐落とし	治った	大仙廟を建てる
⑥	H堡	1960 年代	村人	変な病気	不明	なし		治った	大仙廟に参る
⑦	L村	1980 年代	妻	狂う、独り言	大仙の憑依	なし	夢の託宣	治った	邪症治療を行う
⑧	W村	子供の時	男性	狂う、跳ね上がる	大仙の憑依	法官／なし	狐払い／夢の託宣	治らなかった／治った	法官廟を建て、邪症治療を行う
⑨	W村	1970 年代	男性	狂う、泣く	大仙の憑依	法官	狐払い	治らなかった	行方不明
⑩	S村	2002 年	妻	意識障害	大仙の憑依	遊医	狐払い	治った	大仙を信じる
⑪	W村	1990 年代	娘	跳ね上がる	大仙の憑依	陰陽仙	狐払い	治った	不明
⑫	L村	1980 年代	女性、若者	不明	陰人、大仙の憑依	農民	出符	治った	不明

筆者は湖北省西北部に位置する W 村（5 例）と S 村（5 例）を中心に邪症治療と狐仙信仰の調査を行ってきた。その意図は

①これまでの邪症治療と狐仙信仰の調査は東北地方と華北地方を中心に行われており、華中地方は空白地帯であること

②W 村は中国における有名な民話の村で、邪症治療や狐仙の話が多数伝承されていること

③S 村は W 村に最も近く、W 村の村人との交流が頻繁に行われ、W 村で伝承された邪症や狐仙の話が S 村にも流出しているものと考えられる。

(1) 邪症の原因

まず、邪症の原因を見てみよう。事例①～⑪を見れば分かるように、湖北省西北部の山村において邪症を引き起こすモノに、狐仙の祟り・憑依が一番多くて9例ある。その他、鬼、家親、山混子、廟の神霊などもあるが、数が少ない（事例⑪）。Thomas DuBois、呉効群と王二杰の調査[24]と同様に、邪症の原因は、ほとんど動物仙[25]であることが分かる。

人間の心身が鬼や動物仙など邪悪なモノによって害を及ぼされる観念は、中国の伝統文化に根差している。漢代の医書『五十二病方』に病気を引き起こす鬼や神霊の記述がある[26]。唐代の『広異記・馮玠』、『稽神録・張謹』に「狐魅症」と「狂疾」が記載されている。「狐魅症」、「狂疾」は狐に惑わされた病症で、気が狂うとか、暴れるとか、意識がはっきりしなくなるとか、情緒をコントロールできないというような症状が現れる[27]。宋代洪邁の『夷堅志・張三店女子』にも「狐魅症」の記載がある。狐に惑わされた男性は「神思憒憒、不能飲啄（意識がはっきりしなくなり、食べることも飲むこともできない）」となったが、やがて民間道士に狐を払ってもらい、よくなったという[28]。清代の筆記小説『聊斎志異』、『閲微草堂筆記』に、巫覡が狐仙を利用して邪症の治療を行う話や、茅山道士が人に祟った狐を払う話が見られる[29]。同じような記録は現代各地の地方誌にもある。

なぜ当地の村人は、邪症の原因を狐仙など超自然的存在に求めるのか。理由の一つに巫医の存在があげられる。事例の中に、馬子、法官、端公、陰陽仙などの巫医が見られる。彼らは村人に邪症の原因を狐仙などの超自然的存在であると説明している。巫医による説明はやがて村人の口から口へと村中、隣村に広がる。調査地では、狐にまつわる口伝が数多く残っている[30]が、身近で発生した巫医の話もその中の一部となっている。時間が経つと、このような口伝は自然に村人たちの記憶・知識となった。だれかが邪症にかかるたびに、「狐仙に憑依されたのかな」と記憶連鎖的に感じるのではないかと思われる。

(2) 邪症の定義と類型

「邪症」とはいったい何だろう。ここでは、W村の村人の話を引用して説明する。

【事例⑬】 2016年4月、W村、M氏、1963年生まれ

村の人はだれでも邪症のことを知っている。子供は急に高熱が出て、医者にかかっても治らない。若い娘は頭が変になり、ピョンピョン跳ねたりする。このような病状は邪症といわれる。邪症は普通の病院では治らないのだ。よくないモノに憑かれているから、法官〈ファーグウァン：民間の道士〉に払ってもらう。昔からこのような言い伝えがある。うちのお婆に聞いたのだが、半信半疑だ。信じなくてはいけないと思うが、全て信じてもいけないのだ。

【事例⑭】 2016年4月、W村、ZH氏（女）、1963年生まれ

邪症は迷信だ。1980年代の前は厳しく禁じられていた。しかし、病院で治らない病気は邪症の分かる人に診てもらったら治るので、みんな邪症の治療を求めているのだ。うちの娘も小さい頃、邪症になったことがある。病院に行って何百元もかかったが治らなかった。仕方なく馬子のところに行って診てもらったら治った。

【事例⑮】 2016年3月、W村、Z氏、1960年生まれ

病院で治療できる病気は「実病」だ。例えば、風邪や咳など。でも、「邪症」は普通の病院では治らないので、邪症を診る人に頼むしかない。昔、隣村のL村には評判のいい馬子がいた。彼女に邪症の治療を求める人がとても多かった。邪症は病院で治らないといって放置すると大変になり、死ぬこともある。

事例⑪〜⑮を見れば分かるように、調査地の村人にとって、邪症とは病院のような現代の医療施設で治療できない、狐仙、鬼、家親、神などの超自然的存在の憑依・祟りによる病症であると考えられている。村人たちは病気にかかった場合、病院など現代の医療施設における「科学」の治療を優先する。「科学」の治療を受けても治らなかった場合、邪症と判断し、法官や巫医のところで「呪術」の治療を受ける。

費孝通（2002）は1939年の江村調査において、農民の危機対応システムを「科学」と「呪術」に分けている。農民は日常生活の中で、「科学」で解決できる問題と「呪術」でしか解決できない問題を区分して危機に対応している。農民が「呪術」を利用する理由は、「科学」の局限性にあるが、「科学」を排除することはない。[31]

筆者が調査を行った湖北省西北部の山村部においても、村人たちは「病気」という危機に、「科学」と「呪術」の両方を利用して対応している。彼らは病気を実病と邪症に分ける。実病は伝染病など身体の病症と確定でき、村の衛生所や鎮・市の病院などで診断・治療できる病気である。邪症は心の病症が多く、疲労や栄養不足などが原因でかかった可能性が高いと考えられるが、調査地では、その原因が超自然的存在にあると考えられている。

このような病気は中国北方の各地で報告されている。例えば、山東省聊城では、「邪症」が「外症〈ウァイジャン〉」、「歪病〈ウァイビン〉」と呼ばれる。[32] 河北省滄県では、「虚病〈シュービン〉」などの言い方もある。[33] 王二杰は山東省聊城の農村社会における「邪症」の実態を報告し、それを「①未知のモノによる心理的病症。例えば、丟魂〈デューフン：生きている人の体から魂が離れる〉、撞邪〈ジャンシェー：邪霊に惑わされる〉、精神病など；②現代医療で治療できない生理的病症；③日常生活の災厄」という3類型に分けている。[34] 王は「災厄」を「邪症」の1類型とし、「災厄」のカテゴリーで交通安全、結婚相談、風水鑑定などの事例を紹介している。[35]「災厄」を「邪症」の1類型とする理由は、「災厄」が発生した場合、村人が「心理的病症」、「生理的病症」と同様に巫医に慰めを求めるからである（図2）。

調査地では、事例①③④⑤のような頭痛、眩暈などの身体的病症と、事例⑦⑧⑨⑩⑪のような狂気、精神病などの心理的病症の2類型が確認できている。この2類型は王の分類①、②とほぼ同様である。しかし、王の分類③「日常生活の災厄」という類型は確認できていない。筆者の調査では、村人は「邪症治療」と、風水や商売などの「災厄」を分けて対応していることが分かる（事例⑪）。邪症になった場合、巫医に治療を求めるが、商売、結婚など人生や日常生活の災厄が発生した場合、廟の神々に除災を求める（図3）。

王は「災厄」を「邪症」の1類型としているが、この分類は妥当ではないと考えられる。「災厄」とは「当事者の不幸な出来事」のことである。邪症になったことは、家屋の風水が悪いこと、商売が

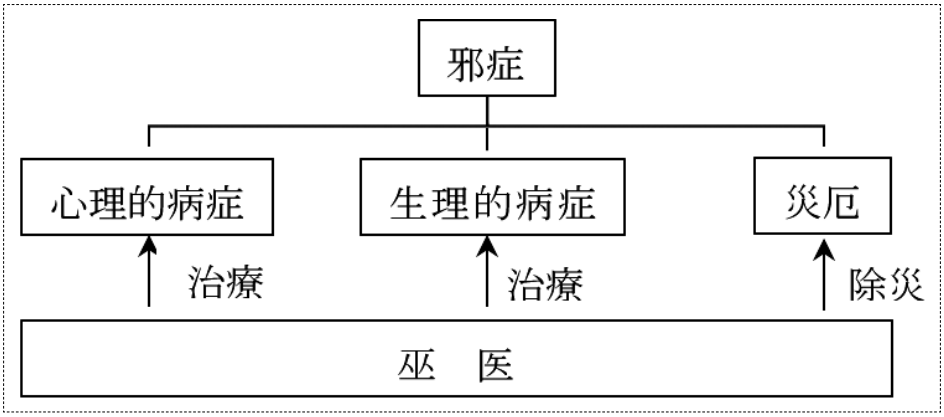

図２　山東省聊城における邪症の類型

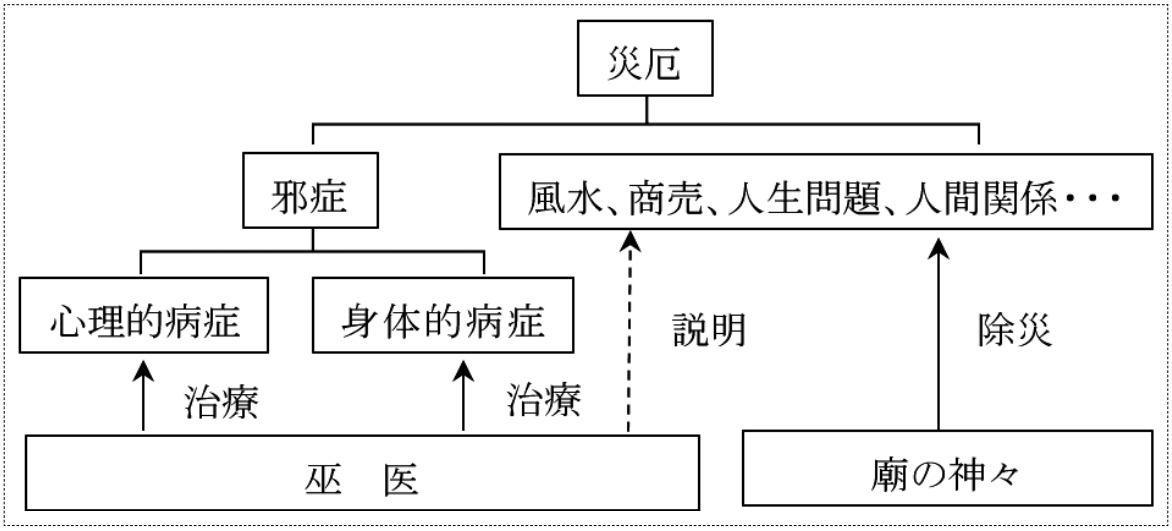

図３　湖北省丹江口における邪症の類型

儲からないこと、結婚の悩み、姑嫁問題などと同様に「当事者の不幸な出来事」であると言っていいだろう。したがって、「邪症」も広い意味での「災厄」であると考えられる。

王は山東省聊城の事例に基づき、「邪症」を「現代の医療方法で治療できない病症；また、結婚、商売など自分の力で解決できない災厄[36]」と定義している。この定義には、問題点が三つある。

①「邪症」の類型として、「心理的病症」と「身体的病症」が言及されていない。

②「邪症」の特徴として、「現代の医療方法で治療できないこと」と「超自然的存在が引き起こしたこと」の２点が言及されていない。

③「災厄」を「邪症」の１類型とすることは妥当ではない。

以上の問題点を踏まえ、筆者は湖北省丹江口市の農村社会の調査事例に基づき、「邪症」の私見定義として「病院のような現代の医療施設で治療できない、狐仙、鬼、家親〈ジャーチン：祖先〉、神などの超自然的存在の憑依・祟りによる、心理的あるいは身体的病症」としたい。

Ⅳ　邪症治療の諸相

次に表１を踏まえて、邪症治療の時期、病者、治療者を整理する。

（1）　邪症治療の時期

調査地の村人によれば、当地では邪症治療の伝統がずっと前からあったという。馬子、法官、端公など様々な民間巫医が存在し、邪症の治療を行っていた。筆者の聞き取り調査では、1950 年代、即ち新中国が成立したばかりの頃に、邪症治療の事例が３件確認できている（事例②⑤⑧）。邪症にかかった場合、隣村の法官、端公などの巫医を家に呼んで治療を行ってもらう。治った病者は屋内に狐仙を祀るか、屋外に狐仙廟を建てて大仙を祀る。現在確認できた屋外の狐仙廟はＨ堡にしかないが、当時は各村にあったという。屋内に祀られた大仙は祭祀者が個人利用するものとされているが、屋外に建てられた狐仙廟はやがてその霊験談が広がり、村人が共同利用するものとなった。

1960 年代半ばから 1970 年代後半までの文化大革命の時期に、邪症治療は政府側に「迷信」と見なされ、厳しく規制されていた。屋内に祀られた狐仙の木牌や軸子などは捨てられ、屋外に建てられた狐仙廟が壊されたのである。しかし、村人たちは秘かに馬子、法官などの巫医に邪症治療を求め、屋内の一隅に狐仙を祀っていた（事例④）。他の人に知られないように、狐仙の神位を設けずに蠟燭と黄紙で簡単な祭祀儀礼を行った（事例⑤⑥）。

1980 年代から 1990 年代まで、邪症の治療が再び盛んになってきた。村人は霊験のある巫医に尋ね、邪症の治療を求める。邪症全癒を祈願するため、屋内に狐仙を祭祀し、屋外では壊された狐仙廟を建て直す（事例⑤）。この時期にも馬子、法官、端公などがあったが、Ｌ村の馬子Ｙ氏に邪症治療を求める人が特に多かった（事例⑦）。Ｙ氏の治療を受けて邪症が治った病者が多かったので、彼女の評判はよくなり、尋ねる人が更に多くなった。広東省や上海市のような遠い所から来た人もいる。一方で、前の時期と比べて端公、法官による治療の事例はほとんど見られない。巫医の他に、普通の村人も邪症の治療を行うようになってきた（事例⑧⑪⑫）。彼らが治療を始めた最大の理由は収入を増やすためだと考えられる。

2010 年代に入ると、村に在住する巫医は減少傾向にある。馬子はまだ存在するが、法官と端公は１人もいなくなった。2011 年に、馬子のＹ氏が亡くなり、Ｌ村の邪症治療が中断するようになった。一方で、巫医の呪術をまねて邪症の治療を行う普通の農民が増えてきている。しかし、彼らの治療は霊験がないため、求める人は少ない。例えば、Ｌ村の ZX 氏、Ｗ村のＧ氏とＷ村のＬ氏。彼らは邪症治療を副業として行っており、普段は農業に従事している。村人は邪症治療の要求がある場合、他の村に馬子を尋ねたり外の遊医を呼ぶしかない。

（2）　邪症の病者――女性の精神的ストレス

事例 12 例の中、邪症の病者に女性が９例ある。女性が邪症にかかることは男性より圧倒的に多いことが分かる。なぜ、女性の方が邪症にかかりやすいのか。2015 年８月、事例①Ｗ村のＦ氏に彼の母親の生活史（ライフヒストリー）について聞き取り調査を行った。

母親は1925年に生まれ、2005年に亡くなった。大変苦労して私たち3人を育ててくれた。元々隣のＬ村に住んでいたが、17歳の頃（1942年）にＷ村に嫁に来て、父親と結婚した。田植え、草刈りなど、若い時からずっと野良仕事をしていた。1949年に姉、1950年に兄、1952年に私が生まれた。1960年ごろ、3年連続の自然災害にみまわれ、穀物や野菜の生産量が減り、大量の餓死者が出た。うちの家族も自家飯米がなくなっていた。ちょうどその時、父親は胃病にかかった。母親は父親のことをとても心配して悩んでいた。親戚から穀物を借りてなんとかその時期を乗り越えたが、1964年に父親が胃病で亡くなった。家は更に貧乏になった。母親はその時から布を織り始めた。出来上がった布を鎮で売り、お金を稼ぐ。朝から晩まで、休むことがなかった。父親が亡くなってから1か月後に母親も病気にかかった。魂を失ったように、体がだるくなり、頭痛が止まらなかった。赤脚医生〈チージャオイーシェン〉[37]の所に行って、注射を1か月以上受けたが、治らなかった。赤脚医生を何人も探して診てもらったが、やはり治らなかった。仕方なく、隣のＦ村の法官を呼んできて診てもらった。大仙の祟りだと分かり、屋内の暗い所で大仙を祀るようになった。

事例①Ｆ氏の母親は典型的な農村女性の1人である。若い時に親から離れて、結婚、育児、野良仕事で大変苦労していた。女性は婚姻、育児などの面で男性より精神的ストレスを受けやすいため、時には元気もなくなり、時には熱が出て頭痛を起こし意識障害に陥ることもある。彼女たちは上述した症状を邪症と認識し、巫医に治療を求める。

また、邪症が治った女性は、ほとんど家に狐仙を祀るようになる。彼女たちは巫医から狐仙が邪症を引き起こした話を聞き、邪症治療を受けることによって、狐仙の信者へと変身した。元々、女性は日常生活で神仏を拝む行為が男性より多いと思われる。彼女たちは狐仙を祭祀することによって、心の慰めを求めることも考えられるだろう。

(3) 多様な治療者

調査事例では、邪症の治療者として、馬子、法官、端公、遊医などの巫医と普通の農民がいることが分かる。村人が病気にかかった場合、病院など現代の医療施設における「科学」の治療を優先する。「科学」の治療を受けても治らなかった場合、邪症と判断し、馬子などの巫医に「呪術」の治療を求める。

馬子は当地の言葉で巫覡[38]を意味する。馬子は女性が多いが、占いをしたり、神託を得て人に伝えたり、口寄せで鬼や、狐仙と会話をして憑かれた人から離れてもらったりする。邪症の治療を行う際、彼女たちはあくびをして体が震えるようなトランス状態になる。

法官とは民間道教の宗教者である。彼らは令牌〈リンパイ〉を持ち、「出符〈チューフー〉」という法術で鬼、狐仙を払い、邪症を治す。湖南省で法術を学ぶ法官が多いといわれる。

端公とは巫教[39]や道教の混淆した民間信仰の宗教的職能者である。彼らは「端公舞」、「跳端公」という儀式で神を招き、除災・招福を行う。

1950年代には、馬子、法官、端公が多かった。1960年代に入ると、邪症の治療が「迷信」と見なされ、政府側に厳しく規制されたため、馬子などの巫医は密かに治療の儀礼を行った。1980年代に

邪症治療が復活し、巫医も活躍できるようになった。中でも、馬子が依然として多かったが、法官と端公はその後継者がいないため、だんだん少なくなってきた。2010 年代に入ると、法官と端公はほぼ消滅した。この時期の治療者は馬子、遊医と普通の農民である。

筆者の聞き取り調査では、馬子は山西省や陝西省など北方から来る可能性が高いが、法官は湖南省や江西省の法教[(40)]に由来する可能性がある。また、端公は大昔から漢水流域にあったという。このように、丹江口市の農村社会では、馬子、法官、端公という異なる系統の民間宗教的職能者が混住して、狐仙信仰を病気治療の実践に利用していることが分かる。

村人が巫医に治療を求める理由の一つは、巫医の「霊験」である。村人たちは 1 人の巫医ではなく、複数の巫医に治療を求める。彼らは「邪症が治る」ことと巫医の「霊験」を同等視する。このように、「霊験」のある巫医は更に評判がよくなり、求める人も増えてくる。もう一つの理由は巫医による治療の料金が安いことである。筆者の調査では、病院で何百元かかっても治らない邪症が巫医の所で安く治る事例が数多くある。

民間宗教者である巫医は、神秘的な呪術に基づく治療儀礼を行った。彼らの施す治療儀礼が、いかに荒唐無稽なものであっても、農民にとっては、それを信じることによって心の安らぎをおぼえ、一定の治療効果があったと考えられる。巫医による治療は心理カウンセラー的な面も大きいと考えられる。

Ⅴ　邪症治療と狐仙信仰

最後に、邪症の治療過程・結果（図 4）をまとめ、それと狐仙信仰の関係を明らかにしたい。

（1）　邪症の治療過程・結果と狐仙信仰

邪症の治療者はほとんど馬子、法官、端公のような巫医である。彼らは病者の病因を狐仙の祟り・憑依だと説明し、その治療を行う。治療を受けた病者は、邪症が治った場合、

①屋内に狐仙を祀る。

②屋外に狐仙廟を建てる。

③治らなかった場合、邪症の治療を始めることがある。

邪症の治癒か否かにかかわらず、病者は狐仙への畏敬・信仰を持つようになる。

①屋内に狐仙を祀る場合、病者の狐仙への個人信仰はその家族・子孫に影響を与える。その家族・子孫は狐仙の祭祀を継続し、狐仙に無病息災の願掛けをし、身体・心理的病症が起こる際、自然に巫医を求めるようになる。

②屋外に狐仙廟を建てる場合、邪症全癒の霊験談が村中に広がる。病者の狐仙への個人信仰はその家族・子孫だけではなく、広い範囲の村人たちに影響を与える。狐仙信仰は狐仙廟の共同利用によって個人信仰から共同信仰へ変わると考えられる。このように、狐仙を信じる村人は当該病者と同じような病症が起こった際、狐仙の祟り・憑依と認識して巫医に治療を求める。

③邪症が治らなかった場合、病者は更に生活が苦しくなり、一定の生活水準を維持するため、邪症の治療を行うことがある。その治療を行う前提として、狐仙信仰を利用することが必要とされる。

上述したように、湖北省西北部の山村では、邪症治療と狐仙信仰が密接に関連していることが分かる。また、狐仙の祟り・憑依は邪症の原因とされ、それが鎮まるように狐仙が祀られる。

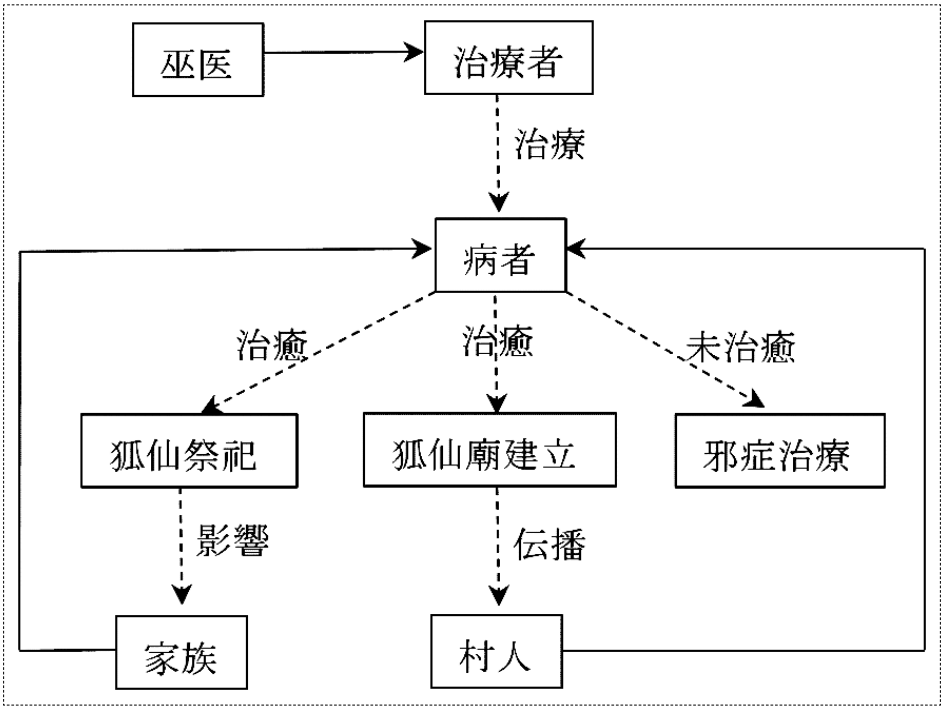

図 4　邪症治療の過程・結果

(2)　邪症の説明体系としての狐仙信仰

中国人にとって、狐は古代から身近な動物であった。狐が霊力を持つ生き物と信じられ、やがては狐信仰、狐神信仰、狐仙信仰という伝承となって定着していくのである。湖北省西北部の山村地帯には、かつて山の中に数多くの狐が棲んでいた。狐は山と村の間を往来し、時には野原や山道で村人と出会い、時には村人の家に入る。長い時間が経つと、自然獣の狐が修行を積み重ねて、狐仙という超自然的な存在となり、霊力を持つようになる。狐仙は村に入り、不当に扱われると悪戯をしたり村人に憑いたりして、邪症を起こす。

では、狐仙信仰と邪症治療はいったいどんな関係を持つか。両者の関係について、Thomas DuBois は「邪症治療の技術は地方の文化 ── 民間信仰に根差している」と主張し、王二杰は「邪症治療は社会変革期における民間信仰の一形態である」と結論づけている。湖北省の事例では、邪症治療は狐仙信仰という地域の民間信仰の文脈の中で成り立つことが分かる。狐仙信仰は巫医に利用・説明され、病者 / 信者に伝承される。Thomas DuBois の結論は筆者の調査結果とほぼ同じである。しかし、王の「邪症治療は社会変革期における民間信仰の一形態である」と断言することができない。邪症治療は信仰の強化作用を持つと思われるが、村人の生活実践であり、信仰ではない。小松和彦（2009［1994］）は日本（高知県）での調査に基づき、病気と民間信仰の関係について、次のように述べている。

病気はいかなる社会においても生じる。だが、その病気がどのようにして生じるかという説明

は、社会によって千差万別である。日本の民俗社会では、こうした病気の説明の一つとして「憑霊」という概念がみられた。

……この異常な出来事としての病気に対して、一般の人びとは十分な説明体系も、したがってそれについての十分な対処、治療の方法も知らない。もちろん、民俗社会でも科学的に充分根拠のある病気に対する治療法は存在していた。

しかし、こうした日常的思考の枠内で処理しうる病気はかぎられており、多くの病気は日常的思考を越えた形で生起する。生起している病気を前にして、一般の人びとは、その病気が、どのような原因で生じたのかを説明したいと欲するが、しかし彼らはそれを充分に説明しえないのである。憑霊を含む病気の民俗的説明体系は、こうした一般の人びとには説明しえない異常な現象＝病気を説明するための体系であり、この説明体系は、一般の人びととは異なった社会的存在である宗教者たちによって維持され運用されていると考えられる。(41)

筆者は小松の意見を踏襲したい。同じ地域社会においても、湖北省の事例のように、病気に対して、病院など現代の医療施設で治る病気と治らない病気がある。「科学」の治療を受けても治らない「邪症」に対して、村人は十分な説明体系も、それについての対処、治療方法も知らないのである。狐仙信仰は正に小松がいったとおり、この「邪症」を説明する際に使われる説明体系であると思われる。狐仙の祟り・憑依は邪症の原因とされ、それを払い落とせば邪症も治る。このように狐仙信仰は邪症の説明体系として巫医によって維持され運用されるようになる。また、邪症治療という実践を通じて治療者 / 巫医と病者 / 村人の双方によって伝承されと考えられる。

おわりに

筆者は 2014 年から 2016 年まで、それまで狐仙信仰調査の空白地帯であった華中地方に入り、湖北省西北部の山村部において狐仙信仰の現地調査を行った。調査地では、狐仙が家に祀られる理由に、邪症〈シェージャン〉治療と富の増加があげられるが、「病気が治った」という理由で狐仙を祀り始める事例が多い。それは、当地では狐仙の祟り・憑依が邪症の原因と見なされているためである。村人たちは「病気」を「実病〈シービン〉」と「邪症」に分けて対応する。「邪症」は狐仙などの超自然的存在の憑依・祟りによる、心理的あるいは身体的病症のことであり、病院のような現代の医療施設では治療できない。邪症の原因に、鬼、祖先、神の祟りなどがあるが、狐仙の憑依、祟りがほとんどである。本稿では、湖北省西北部の山村部における邪症治療の実態を報告し、それと狐仙信仰の関係を明らかにした。

当地における邪症の治療者として、馬子、法官、端公などの民間巫医がある。彼らは邪症の原因を狐仙などの超自然的存在と説明し、邪症の治療を行う。馬子は狐仙を守り神として祀り、その霊力を利用して治療を行うが、法官、端公などは狐仙を払うことによって治療を行う。巫医は狐仙信仰の伝播者として存在することが分かる。

邪症の病者に女性が圧倒的に多い。村社会の女性たちは婚姻、育児などの面で男性より精神的ストレスを受けやすいため、時には元気もなくなり、時には熱が出て頭痛を起こし意識障害に陥ることも

ある。彼女たちは上述した症状を邪症と認識し、巫医に治療を求める。邪症が治った際、病者は狐仙の信者となり、その信仰の伝播者となる。

このように、狐仙信仰は邪症の説明体系として巫医によって維持され運用される。また、邪症治療という実践を通じて治療者／巫医と病者／村人の双方によって伝承されると考えられる。

本稿では多様な巫医を紹介したが、村人たちからの聞き取り調査で得たデータが多く、彼らの現状、成巫過程、村落社会との関係などについてはまだ明らかになっていない。また、邪症治療と狐仙信仰の湖北省における歴史的展開を究明するには地方誌など歴史文献の調査も必要となる。これらの問題は今後の課題として残し、補充調査を重ね論文としてまとめたい。

注

（1） 本稿では、重要な専門用語の後ろに括弧〈 〉をつけ、現地の発音をカタカナで表記し、意味を加える。

（2） 中国古代狐信仰の発生と変遷の過程、狐神から狐仙への移行について、胡堃（1992）「中国古代狐信仰源流考」に詳しい。

（3） ここ数年、狐仙祭祀の代表的な調査報告について、劉正愛（2003）東北地方遼寧省の事例、KANG Xiaofei（2006）西北地方陝西省の事例、Thomas DuBois（2009）と周星（2011）華北地方河北省の事例、王加華（2012）華北地方山東省の事例などがあげられる。

（4） 中国民俗学界では、狐の嫁入りや狐の祟りなどの狐話が「狐精故事」と呼ばれる。

（5） 程亮（2016a）「狐精故事の特徴と類型」による。

（6） 程亮（2016b）「狐仙信仰の現在」p. 124 による。

（7） ここでは、治療を行う民間宗教職能者を指す。調査地では、馬子、端公、法官などがある。

（8） H 堡は S 村に属するため、その戸数と人口数が S 村の統計数字に含まれる。

（9） 2015 年 3 月、8 月に行った、W 村の L 氏、W 氏、L 村の YT 氏からの聞き取りによる。

（10） 民間道教の宗教者、法術で精怪を払い、邪症を治す。湖南省で法術を学ぶ法官が多いという。

（11） 道教から派生した民間宗教職能者で、「陰陽先生」、「地理師」、「風水先生」などとも呼ばれる。調査地においては農民が兼任することがほとんどである。陰陽仙は陰陽、八卦、風水理論の専門家であり、葬儀・結婚式の期日の選定や墓・家屋の地相の鑑定や運命判断などを行う。

（12） 馬子は現地の言葉で、巫覡の意味である。口寄せで狐仙と会話をして、憑かれた人から離れるよう説得する。女性が多い。

（13） 端公とは巫教や道教の混淆した民間信仰の宗教的職能者である。彼らは「端公舞」、「跳端公」という儀式で神を招き、除災・招福を行う。

（14） 中国古代の駅道の宿場を意味し、地名に多く用いられる。

（15） 願ほどきの時に奉納する赤い布。

（16） 感謝の意を表した言葉が書かれた旗。

（17） 程亮（2016b）「狐仙信仰の現在」p. 122 による。

（18） 道教の儀式に使われる法器。鬼、化け物などを駆除する作用を持っている。令牌には道教独自の符文が書かれている。

（19） 魔除けの水。法官は邪症治療を行う際、手に鈴を持ち、口から法水を吹きながら呪文を唱える。

（20） 石製のローラーで、地面に広げた穀物の上を引いて脱穀する民具。

（21） 梱包した黄紙の数量を表す単位の名称。黄紙 1 梱は普通 100 枚、あるいは 200 枚である。

（22） 中国道教の神々の中でも最高クラスの神。武当山での修行の末、天に昇ったという。

（23） 道教で、老子を神格化した称。後漢以後さまざまな伝説とともに神格化され、六朝時代に道教の神の一つとしてこの名が定着した。

(24)　Thomas DuBois（2009）：河北省滄県における虚病の調査；呉効群（2011）：河南省王屋山香邪病の調査；王二杰（2013）：山東省聊城における外症の調査。

(25)　山で修行を積み重ね、霊能力を持つようになると信じられた動物のことである。例えば、大仙（狐）、西仙（イタチ）、長仙（蛇）などである。

(26)　支鈺明（2013）『「五十二病方」中的鬼神』pp. 44-47 による。

(27)　李剣国（2002）『中国狐文化』p. 95 による。

(28)　同上 pp. 142-143 による。

(29)　同上 pp. 200-203 による。

(30)　具体的内容は、程亮（2016a）「狐精故事の特徴と類型」を参照。

(31)　費孝通（2002）『江村経済：中国農民的生活』pp. 148-151 による。

(32)　王二杰（2013）「社会転型期的外症治療及信仰伝承」pp. 16-33 による。

(33)　Thomas DuBois（2009）「神霊、教派、香頭 ── 地方文化中的宗教知識」p. 119 による。

(34)　王二杰（2013）「社会転型期的外症治療及信仰伝承」p. 16 による。

(35)　同上 pp. 29-32 による。

(36)　同上 p. 9 による。

(37)　文化大革命の時期に中国の農村地域で養成された速成の医者。

(38)　シャーマン。神や精霊と直接的に接触・交流し、その間に神意を伝え、予言をし、病気治療を含むいろいろな儀礼を行う呪術・宗教的職能者である。漢語ではシャーマンのことを巫覡（ふげき）の語で表すが、巫は女性、覡は男性を意味する。

(39)　巫教とは漢民族のシャーマンニズムである。巫術、巫道などとも呼ばれている。

(40)　法派とも呼ばれ、道教の 2 大系統の一つとなっている（もう一つの系統は道派である）。道派はその神職が道士と呼ばれることに対し、法派は法師、法官と呼ばれる。

(41)　小松和彦（1994）『憑霊信仰論』pp. 124-126 による。

参考文献

（日本語）

胡堃　1992「中国古代狐信仰源流考」藤井良雄訳注、『福岡教育大学紀要』41（1）：pp. 19-31

小松和彦　2009［1994］『憑霊信仰論 ── 妖怪研究への試み』講談社

劉正愛　2003「動物信仰 ── 民間信仰のもうひとつの実態」、渡辺欣雄編『アジア遊学 58 号　特集：路地裏の宗教』pp. 153-164、勉誠出版

程亮　2016a「狐精故事の特徴と類型 ── 湖北省丹江口市六里坪鎮度伍家溝村の口頭伝承を事例に」『歴史民俗資料学研究』21 号：pp. 57-79

程亮　2016b「狐仙信仰の現在 ── 湖北省丹江口市の農村社会における大仙・西仙祭祀をめぐって」『比較民俗研究』30 号：pp. 109-126

（中国語）

費孝通　2002『江村経済：中国農民的生活』商務印書館

李剣国　2002『中国狐文化』人民文学出版社

李寿菊　1984『狐仙信仰与狐狸精故事』台湾学生書局

李慰祖　2011［1941］『四大門』北京大学出版社

杜博思（Thomas David DuBois）　2009「神霊、教派、香頭 ── 地方文化中的宗教知識」池楨・胡雯訳、『民俗研究』2009（4）：pp. 120-136

王二杰　2013『社会転型期的外症治療及信仰伝承』浙江師範大学修士論文

王加華　2012「賜福及降災：民衆生活中的狐仙伝説及狐仙信仰 ── 以山東省濰坊市禹王台為中心的探討」『民間文化論壇』2012（1）：pp. 82-88

呉効群　2011「邪病及其与社会文化的関係 ── 河南王屋山区民間香会組織巫術治療的社会人類学研究」『民俗研究』2011（2）：pp. 240-255
支鈺明　2013『「五十二病方」中的鬼神』首都師範大学修士論文
周星　2011「四大門：中国北方的一種民俗宗教」、李慰祖『四大門』pp. 146-196、北京大学出版社
（英語）
KANG Xiaofei, 2006　*The Cult of the Fox: Power, Gender, and Popular Religion in Late Imperial and Modern China*. Columbia University Press.